

[学会] 第988回千葉医学会例会  
第一内科教室同門会例会

日時:平成11年1月30日(土) 8:30~17:45

場所:ホテルサンガーデン

1. 急性心筋梗塞発症を契機に発見された膜性腎症の1例

前田日利, 田村 憲, 山田泰司  
藍 寿司, 畦元亮作  
(県循環器病センター)  
小川 真 (千大)

症例は31才男性, 前壁中隔梗塞で入院。尿中蛋白は持続して1g/日以上だったことから腎生検施行, 膜性腎症が強く疑われた。本症例では喫煙, 高血圧, 低HDL-C血症を認めたほか, 若年性心筋梗塞のリスクファクターとして知られるLp(a)の上昇が認められたことから, 31才という年齢にもかかわらず多枝病変性心筋梗塞を発症したものと考えられた。Lp(a)はネフローゼ症候群などの腎疾患で上昇することが知られており, 本症例は心筋梗塞の発症が膜性腎症のLp(a)の上昇を介して関与している可能性が考えられた。

2. 強皮症腎クリーゼの1例

長谷川茂, 家里憲二, 吉田弘道  
山本駿一  
(千葉社会保険・腎臓内科)  
中村広志, 石井 浩, 宍戸英樹  
(同・内科)  
木村邦夫, 森 義雄, 西荒井宏美  
(同・健康管理センター)  
伊藤一茂 (同・透析科)

症例は67歳の男性。著明な高血圧と心不全, 急速に進行する腎不全で入院となった。Ca拮抗剤等で血圧をコントロールしたがCRE9.2, BUN150と上昇し, 血液透析を行った。入院後, 両手から前腕に及ぶ軽度の皮膚硬化が認められ, 他の所見と合わせて本例を強皮症と考え, 腎不全は本症に合併する腎クリーゼと診断した。特効薬であるカプトプリルを投与し透析は離脱できた。しかし同薬による皮疹・発熱が出現したためA-II拮抗薬(ロサルタン)に変更, 良好な血圧コントロールと腎機能の改善をみた。

3. アルコール性肝硬変・糖尿病に合併した両側性気腫性腎盂腎炎の1例

平澤雄一, 斉藤正明, 田中政道  
片平裕次, 佐藤重明(鹿島労災)

患者55才男性。主訴右側背部痛・食思不振。家族歴, 既往歴共, 特記すべき事なし。現病歴, 1992年より他院にて糖尿病, アルコール性肝硬変・高血圧にてfollow。当院にて, 1996年4月よりインスリン治療を行っていた。1998年5月21日全身倦怠感出現。5月22日, 発熱・右側背部痛・食思不振出現。5月26日, 当科受診。精査のため入院。嗜好17才よりアルコール3~4合/day。現症, 右側背部叩打痛を認めた。入院時WBC 15280/ $\mu$ l。CRP34.2mg/dlと強い炎症所見を認めた。また, BS705mg/dl・HbA<sub>1c</sub> 13.8%と血糖コントロール不良であった。血小板 $1.0 \times 10^4$ / $\mu$ lと減少し, DICも疑われた。BUN 105.5mg/dl・CRE 3.62mg/dlと腎機能の低下を認めた。また入院時, エコー・CTにて両側腎は腫大し著明なガス像を認めた。以上により, 両側性気腫性腎盂腎炎と診断し, DICも疑われる事から,  $\gamma$ -グロブリン製剤・IPM/CS 2g/day・CPZ 2g/day・FOY・FFP・Pltの輸血, 十分な補液, 血糖コントロールを行った。治療開始後, 臨床データ及び症状の改善を認め, 腎のガス像も消失したため, 7月24日退院となった。

4. 病態の進行と共に血中IL-5の増加を示したアレルギー性肉芽腫性血管炎(AGA)の1例

大島 忠, 三上直登, 須永雅彦  
藤井京子, 宮城三津夫, 小林康弘  
平井愛山 (県立東金)

症例は61歳女性。1年前に気管支喘息および慢性副鼻腔炎の診断を受けている。喘息の増悪にて入院後, 血管外肉芽腫を伴う十二指腸炎および単神経炎が出現した。病態の進行と共に血中IL-5は増加し軽快と共に検出されなくなった。渉猟しえた文献内では, 病態の進行に伴う血中サイトカインレベルの変化の報告例は